
バカな先輩とバカな後輩

河鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカな先輩とバカな後輩

【Nコード】

N0602P

【作者名】

河鹿

【あらすじ】

小川後輩（戸田先輩のことが好きな女の子）と戸田先輩（照れ屋の男の子）の話。

小川の朝

月曜日の朝：今日から5日間、今週もまた高校生活を送らないといけない。

面倒臭い。

正直やる気起きない。

そんなこと考えながら、友人（多分）の奈緒と早川高校（みんな早高と呼んでる）の正門を目指して歩いていた。

そんなことを言いながら正門を通過した辺りで自転車が1台走って来た。遅刻する時間でもないのに無駄に速い自転車。背中の黒と赤のエナメル。少々くせっ毛のある黒髪：「戸田先輩あああああい！おはようございまあああす！！」

振り返ってくれたそれだけで：小川は：小川は幸せて「：おはよう」うおおおお：

幸せて胸がいっぱいです。

戸田先輩はまた走って行ってしまいました。

「戸田先輩とは、弓道部に所属にしております現在部の副キャプテン！そしてなんと私の直属の先輩なのである！」

「……」

「である！」

「……」

「であ「うるさいわっ！」ばしっ

奈緒ちゃんの手刀が鳩尾にクリーンヒットした。

「ぐぬぬ：やるな、奈緒ちゃんよ：私が育てただけあぐはっ！」

「バカに育てられた覚えはないね」

奈緒ちゃんの返答はたまにいじわるです。

「手厳しいなー」

でも嫌いじゃないよ！

「どこがよ」

奈緒ちゃんは私の親友（だと言いたい）なのです。

こうして小川小海の一週間はじまりはじまり

小川の月曜日（前書き）

みなさん暑いのは好きですか？小川は好きじゃありません。
何故かって？
何故なら暑いからです。

小川の月曜日

「あゝ暑いよ」

今は9月の上旬。ここらの地域はまだ夏みたい。夏よ早く来い。間違えた。秋だよ。夏がまた来たら小川が今度こそ干からびる気がする。

「秋…早く来てよ…」

「俺がどうかしたか？」

「えっ秋が来たの！？やった…じゃなくて！あつくんじゃなくて季節の秋！あつくんを必要としてない！！」

「お前はたまに失礼だな」

このキリッとした目ときめ細やかな肌を持つ短髪の男の子。それがあつくんこと秋田。

あつくんは同じ弓道部の1年で隣のクラス…

そして小川こと私はというと…

只今弓道場の床にへばり付いています

「いつまでダラダラしてんだよ、暑苦しいなお前」

「だって暑いんだもん」

実際暑いです。弓道場は普通に外にあって、そんな部屋の中にあつて冷房ガンガン効いた道場じゃないから外と温度があまり変わらな^い。しかも屋根はあつてもシャッターを開ければ日差しがガラガラで立ってるだけで汗が滴り落ちる…

暑いのが苦手な小川は少し部活選^びを失敗したのかもしれない。

「部活始めるから集合ー」

我が部のキャプテン、遠藤いちな…^{かずなり}一成先輩。

弓道部のみんなからいちなり先輩と呼ばれています。

「取り敢えず自主練、お願いします」

「「お願いします」」

いちなり先輩は気さくな先輩で、色々教えてくれる頼れるお兄ちゃ

んタイプの先輩。いちなり先輩がお兄ちゃんになってくれたら…ふふー

「何ニヤニヤしてるの？小川ちゃん」

「あはーばれました？流石鋭いなあまこと誠先輩は」

誠先輩は黒髪ロングのお姉様。ちちがでかくて羨ましい、全くけしからんちちだよね。

「小川ちゃん」

「ん、何ですか？」

「胸は大き過ぎず小さ過ぎずが1番よ」

そんな論すような目でみられても…

「大き過ぎは大変なの！ブラがない！服がない！ノーブラなんて以つての外！！」

「いや別に私はCあるからそこまで大きくしたい訳じゃ…」

「甘い：甘いわ小川ちゃん、小川ちゃんの胸はまだ大きくなる！宣言してもいいわ、でもね：胸は大きければ大きい程歳をとるにつれ垂れるの！！」

誠先輩は普段と比べものにならない位恐い顔になっていました。

「なあ…」

「あっ戸田先輩」

「何？戸田」

「声…大きいんだけど…」

戸田先輩が顔を赤らめて言うもんだから、可愛いと思った。

そう言えば弓道部は男女混合だから話題も考えて作らなきゃだめなんですよ。

「戸田、何恥ずかしがってんの？思春期？」

でたっ！誠先輩十八番の下ネタ！いや、まだ下でも何でもないけど。「ちがっ…！」

また、先輩の頬がかあっと赤く染まる。

戸田先輩、誠先輩の攻撃に手も足も出ない！

「バカですね、戸田先輩ー先輩が下ネタに突っ込んだ時点で負けな

んです」

「うっ…」つい、思ってることを言ってしまった。私もバカなのか？多分そうだ、残念な頭でごめんなさいお母さん。

「おーい、部活やれよー」

「いちなり先輩すいません」

「さーいちなりからお声がかかったことだし？部活しよっかー戸田は置いていて」

「そうですねー、暑いですけど」

「うっさい、早く準備しろよ」「はーい、副部長」

誠先輩はどこまでお姉様：お嬢様なのか、標的が私じゃなくて良かったと心底思われます。

うちの弓道部は、2年生が10人、1年生が8人の計18人で顧問が2人講師が1人たまに。3年生の先輩もたまに遊びに来てくれるけどそれはまた別の話。

「うー暑い」

「まだ言うか」

「あ、あっくん」

「だってー」

「はいはい、わかったわかったー」

「…ちえー」

あっくんはクール系です

「小川ちゃん」

「何ー？」

ニコニコして私を呼ぶ彼女は深沢真奈。可愛い。モテる。とても羨ましいです。

こんな感じで部活が始まります。何だか緩いけど、結構気に入ります。小川は部活選択を間違ってたらしい。

部活はいつも6時に終わってその後は自主練。いつも残っているのは戸田先輩。今日私も残ってみようかな…練習もしたいし。

掃除が終わって解散になります。

「今日残るのは戸田と？」

「あっはい！残ります！」

「へー小川やるんだ」

「自主練しまくっていちなり先輩を越えます」

「言うじゃん？まあ、俺も今度残るから教えてやんよ」

「え！有難うございます！」

「じゃー戸田と小川、鍵頼むなー」

「ああ」

「はーいお疲れ様でしたー」

「おーまた明日」

こっちを見ずに手を振る姿は、少しかっこいいな、と思わせるものがあります。

「さーやろーっと…」

二人つきりって何だか気まずいです！って今すぐ言いたい！

…ちょっと休憩がてら、先輩の射を見ようかな。

戸田先輩は集中してるみたいだった。そりゃあそうだよ、自主練だもん。

いやいや、そんなことより先輩を見てなきゃ…見て学ぶ何て私にそんな高等な技術？技術でいいのかな？…まあいいか。取り敢えず見よう。

場内には風の音と矢同士が擦れ合う音が響いた。

戸田先輩は丁寧に大三から引分けをする。矢は床と平行を保ったまま的を狙う。右手から自然に弓の弦が遠ざかる。

スパン

遠くの方からの音が鳴る。

目取っ手だ的を見れば、戸田先輩の放った矢は当然と言うかのように的を貫いていた。

「…なあ」

低い、先輩の声が聞こえる。

「え！なんですか！？」

私はまさか声をかけられるとは思わなかったから焦りながら反応した。我ながら見事な慌てっぷりである。

「折角当たったのに『よし』も言ってくれないのか？」

戸田先輩は眉間に皺寄せしながらを少し淋しげに言う。…可愛いなこの人。

「え！？ あ！ すいません、つい見とれちゃって」

「…え」気付いたら本音を言ってしまった。

「すすすすいません！！ 違うんですよ！ あの！！ そういうんじゃないく！」

どういふのだよ、私。

「先輩がかっこよかったからついっ！！！」

私は馬鹿なのですか。

「あ…えーと」

ああ…先輩の顔がみるみるうちに林檎みたいに赤く…。

「ありがとう」かああ

「あ…はい…」

可愛いな、ちくしょう。

「さー！ 小河もやろうかな！ 練習！！」

この空気に耐えられる程、小川は図太くないです。お願いだから、社会にでるまでもう少し図太くなりたい。

そんなことを考えながらしていれば、気付けば部活終了時間になって弓道場を後にし帰宅。

ご飯食べて、明日の英語の予習をして、ドラマ見て寝た。

こんな感じで小川の月曜日は幕を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0602p/>

バカな先輩とバカな後輩

2010年11月22日03時19分発行